

平成 26 年 4 月 20 日

英語語法文法学会主催

第 10 回英語語法文法セミナー開催のお知らせ

英語語法文法学会
会長 内田 聖二

英語語法文法学会では、学会の社会貢献の一環として、2005 年より毎年「英語語法文法セミナー」を開いてきましたが、今年も第 10 回目のセミナーを 8 月 4 日（月）午後 1 時半から 5 時半まで関西学院大学梅田キャンパスにて開催することになりました。今年度のテーマは「使える英文法：語彙・構文研究を現場にいかす」です。プログラムの詳しい内容については当学会のホームページをご覧ください。幸いです。

英語教育の現場では、教える内容は基本的に大きな変化はないように思われますが、ことばは時を経て変わっていきます。英語もその例外とはなりえませんが、むしろこのインターネットの時代ではそのスピードは増しつつあると言っても過言ではありません。このセミナーでは現代英語の語法や文法などの言語事象を最新の英語学、言語学の知見を紹介、援用しながら講義するものです。明日の授業に即役立つ情報も見つかるはず。また、すぐに授業に反映できずとも、いつでも引き出せる背景知識が増えることになるのは間違いありません。

セミナーの対象としては、中学校、高等学校の先生方だけではなく、広く大学の教員、将来教職を目指す学生、院生などを想定しています。もちろん、学会員、非学会員を問いません。研修、研究の機会としてご利用をお考えいただければ幸いです。

たくさんの方のご参加をお待ちしております。

第10回英語語法文法セミナー

テーマ「使える英文法：語彙・構文研究を現場にいかす」

司会・講師	大室剛志	(名古屋大学)
講師	金澤俊吾	(高知県立大学)
講師	滝沢直宏	(立命館大学)
講師	都築雅子	(中京大学)

日時：平成26年(2014年)8月4日(月曜)13:30～17:30
会場：関西学院大学梅田キャンパス
(大阪市北区茶屋町19-19 アプローズタワー10階1004室)

プログラム：

13:30～13:40

会長挨拶とセミナー世話役からの全体趣旨説明

13:40～14:20

金澤俊吾(高知県立大学)

「名詞句にみられる修飾関係とその規則性について」

14:20～15:00

滝沢直宏(立命館大学)

「文法と表現の接点：中学必須単語を有効に使う」

15:00～15:10

-----休憩-----

15:10～15:50

都築雅子(中京大学)

「語彙化のパターンにおける英語と日本語のずれ：衛星砕付け言語と動詞砕付け言語」

15:50～16:30

大室剛志(名古屋大学)

「使役を表す動詞の意味の中身を探る」

16:30～16:45

-----休憩・質問用紙記入-----

16:45～17:25

質疑応答

17:30

セミナー終了

参加費(資料代を含む)：2,000円(当日、受付にてお支払いいただきます)

※ 本セミナーは、学会会員以外の方を含め広く開かれているものですのでどなたでも自由に参加できます。会場収容人数(定員80名)の関係から、参加ご希望の方は平成26年7月28日までに、件名を「セミナー参加希望」として segu.seminar@gmail.com までお知らせください。先着順で受け付けます。

各講師の発表概要

名詞句にみられる修飾関係とその規則性について

高知県立大学 金澤俊吾

[Adj-N]から構成される名詞句は、統語的には形容詞が後続する名詞を修飾していながら、意味的には様々な修飾関係を示す。例えば an interesting book において、interesting は本の内容に関する特徴を表すのに対し、an expensive book において、expensive は本の値段の特徴を表す。この違いは、共起する動詞の違いにも反映される (ex. {read/?buy} an interesting book, {?read/buy} an expensive book)。また、名詞句の中には、動詞と共に起して初めて修飾関係が成立する現象もある (ex. *one's weary way/make one's weary way, *a sad cigarette/smoke a sad cigarette)。

本発表では、名詞句[Adj-N]にみられる様々な修飾関係について、コーパス等から得られる言語資料に基づき検討する。具体的には、英語の定型表現、構文をいくつか取り上げ、形容詞が名詞の語彙情報内のどの意味情報と修飾関係を結ぶのかについて検討する。また、名詞句にみられる修飾関係が、当該名詞句と共に起する動詞を決定する際、重要な役割を果たすことを明らかにする。その上で、英文を作る際、動詞の語彙情報と同様に、形容詞、名詞それぞれの語彙情報にも注意を払う必要があることを示す。

文法と表現の接点：中学必須単語を有効に使う

立命館大学 滝沢直宏

英語には、読めばすぐに自信をもって解釈できても、自分ではなかなか書けない表現が多々ある。例えば、(1) He was born to an American father and a Japanese mother. や (2) All humans are born with the ability to acquire a language. という文は、難しい語は全く使われていない平易な文だが、いざこのように書こうとすると、(大学での英語教育の経験から判断して) 容易ではない。一方、(3) He was born in Tokyo. のように、中学生でも容易に表現できる文もある。(1)(2)のような文は、いわば「書けそうで書けない」英文と言える。この種の英文には、-ly 副詞に関わるものも多い。例えば、freshly baked bread や mainly because~のような表現である。-ly がないと、中学校で習う平易な語 (fresh, main) なのに、-ly が付いたパターンになると急に難度が増す。本発表では、こうした「書けそうで書けない英語」に注目し、中学必須単語を有効に活用する方法を探りつつ、日英語の構造上の相違と関連させながら文法と表現の接点を考える。

語彙化のパターンにおける英語と日本語のずれ：衛星辞付け言語と動詞辞付け言語

中京大学 都築雅子

英文を日本語に訳す際、いわゆる直訳で訳せない場合がある。

- (1) a. Mary blew/ waved the candle out.
- b. John ran/ walked/ drove/ sailed / flew off with money.

例えば上記の英文の場合、小辞 out, off を日本語では動詞で訳さざるを得ない。

- (2) a. メリーはろうそくを吹いて/扇いで消した。
- b. ジョンは (盗んだ) お金を持って歩いて/走って/車で/飛行機で逃げた。

これは、日本語で「消した」や「逃げた」といった動詞で表されている「状態変化」や「移動」事象が、英文では小辞がつくことにより表されるからである。このような英語と日本語のずれは、ある意味成分がどのような範疇（品詞）により表されやすいかという語彙化のパターンの体系的な相違に起因している（Talmy 2000）ことを、ゲルマン言語に特有な結果構文、移動構文、one's way 構文などに言及しながら示していく。こうした語彙化のパターンの体系的な整理と相違の理解が、より自然な文への言い換えやより納得のいく日英語の説明へ繋がり、教育の現場に貢献できる可能性を模索したい。

使役を表す動詞の意味の中身を探る

名古屋大学 大室剛志

英語の使役を表す動詞には、例えば以下のようなものがある。

(1) force, prevent, pressure, impede, help, let, drag, throw, constrain, frighten

一言で使役といっても、これらの動詞が表す使役の意味は、それぞれの動詞の意味の中身まで深く探ってみると、微妙に異なる。使役の効果が肯定か否定か、使役の効果が必ず実現するか否か、作用者と反作用者の対立が有るか無いか、原因と効果に時間的重なりが有るか無いか、出来事か状態か、物理か心理かなどを考えてみることで、英語の使役動詞の意味に関する理解を深めることを目指す。

また、語彙的使役 (x kill y) と迂言的使役 (x cause y to die) には以下のような違いがあるといわれている。

(2) a. ??Bill killed Harry on Tuesday by giving him poison on Monday.

b. Bill caused Harry to die on Tuesday by giving him poison on Monday.

どうしてこのような違いが生じるのかを考えてみることにする。

意味論者である Talmy と Jackendoff の研究を教育の現場に還元したい。